

の義務も果せませうよ。ですが貴女は——一體貴女の方の義務と被仰るのはどんな事です』

『そりや妾自分だけに解つて居りますの』

ラヴレッキーは思はず立ち上つて

『まさかバンシンと結婚なさる御決心ではありますまいね』と彼は云つた。

リーザは殆んど見えるか見えない位の微笑を浮べて

『いゝえ』と云つた。

『あゝ、リーザさん、リーザさん』とラヴレッキーは叫んで『それならば最う僕等はなんて幸福でせう』

リーザは再び彼を見て

『貴方だつて御解りでせうね。幸福は妾達の方から出来るものではなくて、皆神様の思召にあるのですわ』

『さうですとも、貴女にして……』

と云ひかけた途端、次の間から俄に戸が開いて、マルファ・チモフェーヴナが帽子を手に持つて入つて來た。

『やつと見付けた』と云つて、彼女はラヴレッキーとリーザの間に立ちながら

『妾自分で藏つて置きながらね。眞實年を取るとかうだからね。尤も若い者だつてさう大して好い譯でもないけれど』

『それはさうと、お前さんは妻と一緒にラヴリーキーへ行くつもりなのかえ』とマルファ・チモフェーヴナはラヴレッキーの方へ向いて云ひ足した。

『ラヴリーキーへ、彼女とですか。解りません』と暫くためらつてからラヴレッキーは云つた。

『階下へは行かないの』

『今日ですか——今日は行きません』

『さうともく、それで無けりやならない。だが、リーザ、お前さんは階下へ行かなけりならないんぢやないかえ。まア、如何したと云ふんだらう、妾に餌をやるのを忘れて居た。一寸待つて頂戴よ。直にあの——』と云ひさまマルフフ。チモフエーヅナは帽子も被らずに驅けて行つた。

ラヴレッスキーは慌て、リーザの傍へ歩み寄つて

『リーザさん』と哀願するやうな聲で云つて『僕等は永久に別れるんでせうね。あゝ最う胸も何も裂けてしまひさうです——お別れにせめて手を』

リーザは首を上げた。殆んど最う光の消え失せた彼女の物愛げな眼は、ちつと彼に据ゑつけられた。

『いゝえ』と彼女は云つて差し出さうとした手を引込めて『いゝえ、ラヴレッスキーさん（始めてラヴレッスキーと云ふ名を用ひたのだ）手は止しませう。何の役にも立たないではございませんか。どうぞ最う行つてくださいますし。お解りでせう』

が、妾は貴方を眞實思つて居ります……え、眞實に思つて居りますの』と更に彼女は努めて云ひ足した『でも決して、……決して』

かう云つて彼女は口にハンカチーフを押し當てた。

『せめてそのハンカチーフを下さる譯には』扉の開く音がした……ハンカチーフはリーザの前垂へ滑り落ちた。ラヴレッスキーは床へ落ちない間に慌て、それを攫んで、側衣囊へ振ち込んだ。と振返つた眼がマルファ・チモフエーヅナの眼と出遇つた。

『リーザや、御母様と呼んでるらしいよ』と老婦人が云つた。

リーザは言下に起ち上つて、出て行つた。

マルファ・チモフエーヅナは前と同じく隅の方に坐つた。ラヴレッスキーがそろく暇を告げにかゝると、

『フェードル』とマルファ・チモフエーヅナは突然云つた。

「何ですか」

「お前さんは正直な男なのかえ」

「え？」

「お前さんはねえ、正直な男なのかえと訊くのだ」

「さうなんでせうよ」

「へえ。でもまア妾に是非お前さんの口から私は正直な男なんですと云ふ言葉を云つてくれないかえ」

「慥にさうです。ですが何故そんな事を御訊になるんです」

「妾にはその理由は解つて居るのだ。お前さんだつて、ねえ、好く考へて見れば馬鹿でない限は、その理由は解りだらう。ではまア左様ならしやう。好く来てお呉れだつたねえ。好く今お前さんの誓つた言葉を覚えて居てお呉れよ。さア接吻をして貰ひませう。まア、ねえ、どんなに辛いでせう。だけどそりや誰だ

つて辛くない者はないんだよ。以前妾は蠅が羨ましくてならかつたものだ。何でも妾は蠅位幸福な者はないやうに思つて居た。所がね、或晩妾は一疋の蠅が蜘蛛の巣に懸つてブン／＼嘆いて居るのを聞いたのだ。その時妾はつく／＼思つた。彼奴等も矢張苦しい事があるのだとねえ。さう思つたのだ。フエードヤ、何とも最う仕方のない事だがね、でもどうか先刻誓つた事は覚えて居てお呉れよ。左様なら」

ラヴレッキは裏梯子を下りて、門まで行くと、下男が一人追駈けて来た。

「奥様が是非旦那に御出くださるやうに被仰るのです」と、彼はラヴレッキに告げた。

「どうぞねえ、今度だけは参りかねますつて、よろしく云つて頂戴」とラヴレッキは云つた。

「奥様がわけての御頼なんでございますから」と下男は言葉を次いで「それに奥

様が一人限で居るからと申せと云ふ御命令なんでしょうから』
『お客さんは最う歸つたんだね』とラヴレッキーは訊ねた。
『左様でございます』と下男は齒を剥き出して笑ひ氣味で答へた。
ラヴレッキーは肩を縮めて下男の後について行つた。

四十三

マリヤ・デミトリエヅナは只獨居間の安樂椅子に座つて、コロン水を嗅いで居た。橙花水の壘が傍の小さな卓の上に置いてある。彼女は何事に思ひ亂れて、餘程神經が興奮して居るらしく見えた。

ラヴレッキーはそこへ入つて

『何か御話でもあるんですか』と冷淡さうに頭を下げて云つた。

『さうなんですの』とマリヤ・デミトリエヅナは答へて、水を少しばかり啜り

『ずつと叔母さんの方へいらしたと承はつたものですから、此方へも御出くださるやうに御願致させた譯なんです。少し御話致したい事があるもんですから。まあどうぞ御掛けなさいまし』と云つてマリヤ・デミトリエヅナは息を繼ぎ、『あの御存じでせうか』と云ひつゞけて『奥様がお見えになつたのですよ』
『僕も知つて居たんですよ』とラヴレッキーは云つた。

『さア、それですよ。妾の申したいのは。つまり彼女がいらして、妾が御遇しました、その事ですよ、妾の貴方に申したいのは。有難い事には妾もまア世間から尊敬を受けて居ると云ふやうな譯ですから、それだけまた世間に對しても相當な事もしなければならぬのです。そんな譯で貴方に對して面白からぬ事だとは解つては居ましたが、矢張妾の方からは彼女を拒むやうな事は出来ないので。何しろ彼女は妾には親戚なんですもの——貴方を通してですよ。ですから妾の身になつて見れば、どんな事があつても彼女を受付けないやうな事は出来ないので

—それには御異存はないでせう』

『つまらない事に氣を使つてゐらつしやるもんですね』とラヴレッキは答へて『貴女の御所置は至極結構ですよ。僕は腹なんか立てゝは居ません。それに僕だつてワルワラ・バーヴロヅナが知人を訪問するのまで禁じるやうな氣は少しもありませんよ。僕が今日貴女に御目にかゝりに參らなかつたのは、たゞ彼女と顔を合すのが厭だつたからなんです—それ以外何もありません』

『貴方にさう云つて頂くと妾は眞實に嬉しいのです』とマリヤ・デミトリエヅナは大きな聲で云つて『貴方の立派な御氣象ではそりや最う當然の事とは思つて居たんですけれどねえ。でも妾のゐんなに激しましたのだつて別に不思議はありませんわ。妾は女で、而も母なんですもの、それに貴方の奥様はあの通り……無論妾には御二人の間の事は何とも今更申されないので、それは最う奥様にも申して置いた事なんですけれど、それにしても奥様はあの通りどんな者でも好い感じを

抱かすには居られないやうな面白い方なんですものね』

ラヴレッキは笑つて、帽子をいちつて居た。

『で改めて一つ御話したいことがあるのですが』とマリヤ・デミトリエヅナは言葉を續けて、心持ラヴレッキの方へ身を近寄せ『どうぞあの奥様のしとやかなつゝましやかな所を見て上げてくださいな。眞實感心ですわ。それに貴方の事とどんなに云つて居らつしやるとお思ひです。妾は眞實彼人には濟まない事を致しました。妾には彼人の眞價が解らなかつたのです。彼人は天使のやうです、並の人間ではありません。まアそんな風に被仰つて下さよ。眞實天使、被仰つたのですよ。それ程までに後悔して居らつしやるのです—まア、ほんとに、妾あんなに立派に後悔する人を見た事がありません』

『それはさうでせうがねえ』とラヴレッキは云つて『何だかあまり疑深いやうですけれど、あのワルワラ・バーヴロヅナは客間で歌なんか歌つたと云ふぢやあり

ませんか。後悔して居る最中に歌なんか歌ふつて、どうしたんでせう』

『まア、そんな事を恥しくもなくて好く被仰ひますのねえ。奥様の歌をお歌ひなすつたり、ピアノをお弾きなすつたのは、皆妾への御深切からなんですよ。妾の方から無理に御願したのですもの。いえ、まるで命合けるやうな體裁でしたもの。何しろあんまり悲しさうにして居りましたもんですから、どうかして御氣を紛らして上げたいと思つて——それに大變音樂の方が御上手だと聞いて居たものですから。奥様の方では、そりや最う確に萎れ切つて居りましたんですよ。それはセルゲイ・ペトローヴィチに御聞きになつても解る事です。どう見たつて傷ましい女としか見えませんでした。それでもまだ御不足ですか』

ラヴレツキーは肩を縮めたゞけで、何も答へなかつた。

『それにまアあのアダちゃんの可愛い事つて、まるで小天使のやうでしたの。何て好い御子でせう。それに御利發で居らつしやる事つてないんですもの。フラン

ス語は立派に被仰るし、ロシヤ語もお解りのやうですし——さうく、妾の事をロシヤ語で「おばちゃん」と被仰るんですよ。それに御存じの通り少しもはにかむやうな事がないんですもの——一體あの年頃の子供ははにかむのが多いもんですけれど、それが少しも無いんですもの。まア不思議な程貴方に似てゐらつしやいますこと。眼と云ひ、額と云ひ——まるで貴方と瓜二つですよ。正直な所、妾はさう並外れて子供が好きだと云ふ方ではないのですけれど、あの御娘には悉皆参つてしまひました』

『ですけれど』とラヴレツキーは突然に云つて『一體そんな事を被仰るのは何の爲なんですか』

『何の爲ですつて?』と云つて、マリヤ・デミトリエヅナは又してもコローン水を啜ぎ、水を啜つて『さア妾が貴方にこんな事を申しますのはね。妾と貴方とは親戚ではあるし、それに貴方には妙に慕はしい所がある——つまり貴方の胸の中

の立派な事が能く妾に解つて居る、そんな事からなんですよ。まあ聞いてください、妾はこれでも兎に角いろ／＼な世間を見て来た女なんですから、さう無暗な事は申しません。ね、どうぞ彼女を赦して上げてください、奥様を赦して上げてください』マリヤ・デミトリエヅナの眼は急に涙で一杯になつた。『年がお若くて、何も世間を御存じなかつた……それに多方向か悪い實例でもあつたのでせう……それを思つて上げて頂戴。せめて年寄でもあつてちやんとして上げるやうだと好かつたのだけれど、それもないんですものねえ。どうぞ赦して上げて下さい。最う十分罰しられて居らつしやいますよ』

涙がマリヤ・デミトリエヅナの頬を傳つた。彼女はそれを拭はうともしない。泣く事が好きなのだ。ラヴレッキは荆棘の上にも座つて居るやうであつた。

『あゝあ、何て苦しい目に遇はされるんだらう。今日は一體何と云ふ日なんだらう』かう彼は心で思つた。

『何とも返事してくだらないの』とマリヤ・デミトリエヅナは又口を切つて

『貴方は一體どう思つて御出なのでせう。まさか残酷な事はありますまいね。いえそんな事はある譯がない。妾の云つた事には御異存なんかありませんわね。いつか必然善い報ひが来ますよ。さアどうぞ妾の手から奥様を受取つて下さいまし』

ラヴレッキは思はず椅子から飛び上つた、マリヤ・デミトリエヅナも起ち上つて、慌てゝ衝立の影へ駆け込んだかと思ふと、ワルワラ・パーヴロヅナを連れ出して来た。色は蒼ざめ、殆んど死んだ者のやうになつて、眼をうつむけながら彼女は出て来た。その様子は自分のあらゆる思、あらゆる意思を投げ出して、全く自分の身をマリヤ・デミトリエヅナに任せてしまつて居るやうであつた。

ラヴレッキは一步後へ踏み下つた。

『お前はすつと此處に居たんだね』と彼は叫んだ。

『お責めなすつてはいけません』とマリヤ・デミトリエヅナはなだめて『奥様は

此處に居る事をひどくお厭がりなすつたのを、妾が無理にお留め申したので。妾が衝立の影へお置きしたのです。奥様ではそんな事をしては却て貴方を怒らすだけだとくれぐれ被仰つたんですけれど、妾が承知しなかつたのです。妾は奥様よりも好く貴方の御氣象を飲み込んで居るもんですからね。さア、妾の手から奥様を受取つて下さい。さア、ワルワラさん、何も構ふ事はありませんから、旦那様の足下へ身をお投げあそばせ（かう云つてワルワラの腕をグツと引いて）これですア……」

「一寸お待ちください」とラヴレツキーは低いが、驚くべく力の籠つた聲で遮つて「貴女は實にお芝居がお好きですねえ」（ラヴレツキーの云ふ通り、マリヤ・デミトリエヅナは今でも一寸お芝居めいた事を好む女學生時代の情を持つて居るのだ）「貴女には面白いでせうが、他の者には面白いばかりぢやありません。貴女は此芝居では主要な人物ぢやだが僕は貴女には何も云ひたくはありません。貴女は此芝居では主要な人物ぢや」

ないんですからね。一體お前はまた僕に用があるのかね」と妻の方へ向き直り「お前に對して出来るだけの事はした筈ぢやないか。此の會見にはお前は與らんとは云はせないよ。そんな事を云つたつて僕はお前を最う信じないんだからね。眞實僕はお前を信ずる事が出来ないのだ、それはお前にも解つてらう。さア、一體お前は如何な用があるのだね。お前は伶俐だから、目的のない事はしない筈だ。お前はきつと以前のやうに僕と一緒に暮せと云ふんだらう。そりや僕には出来ないよ。と云ふのは、何も僕がお前に對して怒つてからぢやない。僕と云ふ人間が以前とは變つたからだ。何でもお前の歸つて來た日にその事は僕が云つたね。そしてその場でお前も心の中で僕に同意したぢやないか。だが矢張お前は世間體にも評判を回復したいんだらう。それでたゞ僕の持家に居るだけでは充分でないから、僕と一つ家に暮したいと云ふんだね。さうぢやないか」

「妾はたゞ貴方に赦して頂きたいのです」と眼を下へ向けたまゝワルワラ・パー

ヴロヴナは云つた。

『赦して上げてください』とマリヤ・デミトリエヅナは同じ事を云つた。

『それも妾の爲めではございません、たゞアダの爲めに、どうぞ』とワルワラ・バ
ーヴロヴナは小聲で云つた。

『それもとゞアダさんだけの爲でなくて、貴方のアダさんの爲ですわ』とマリヤ・
デミトリエヅナが云ひ添へた。

『よろしい。お前の用つてのはそれなんだね』とラヴレツキーは努めて云つて『そ
らなら確に承知した』

ワルワラ・バーヴロヴナはデロツと彼を見た。マリヤ・デミトリエヅナは『あゝ
有難い』と叫んで、又してもワルワラ・バーヴロヴナの腕を前の方へ引張り『さ
アでは妾の手から此女を——』と云ひかけると

『一寸待つてください』とラヴレツキーは抑へて『僕はお前と同棲する事にはす

るけれどね、ワルワラ』と言葉をついで『それはつまり、お前をラヴリーキーへ
やつて僕も堪へ得る限り行つて暮す事にしやう。我慢が出来なくなつたら僕は去
つてしまはう。そして又氣の向く時に戻つて行く事にしやう。僕はお前を欺さう
とは思はないが、それ以上は求めないやうにして貰ひたいのだ。お前は若し僕が
此の方の注文通りになつて、お前を僕の胸に抱き締めて、過去の事は仕方がない、
倒れた木にも花が咲けるからねえなぞと云ふやうな事したら、さぞ心の中で可笑
しい事だらうね。だが、どうせ僕は屈しなければならんだ。尤も僕の此の言
葉の意味はお前には解るまい……それでも構はないさ。繰り返して云ふがね、僕
はお前と同棲するよ……誓ふ事は出来ないがね……まアお前と和睦しやう。再び
お前を僕の妻と認める事にしやうよ。』

『せめてその印に握手でもしてお上げなさいましな』とマリヤ・デミトリエヅナ
は言葉を添へた。涙は最うとつくに乾いて居た。

「僕はこれまで決してワルワラを欺いた事はないんですから」とラヴレツキーは答へて「そんな事をしなくたつて信ずるでせうよ。兎に角ラヴリーキーへ連れて行く事にします。だがね、ワルワラ、二人の間の契約はお前がラヴリーキーに居なくなるやうな事があれば、それで最う破れるものと思つて居て貰はう。では御暇します」

かう云つて彼は二人の婦人に挨拶をして、大急で出て行つた。

「あら御一緒にはいらつしやらないのですか」とマリヤ・デミトリエヅナは後から呼んだ……「構はないで置いてくださいまし」とワルワラ・パーヴロヅナは呟いた。と思ふといきなり抱きついて、感謝の意を述べ、手に接吻し、呼ぶに救世主を以てした。

マリヤ・デミトリエヅナは思ふさまその愛擁を受けた。だが心の底ではラヴレツキーにも、ワルワラ・パーヴロヅナにも將に開かれんとして居る新しい場面に

も、彼女は不満足であつたのだ。何れにしろ大して感情を動かされる程の事はなかつた。彼女の所念ではワルワラ・パーヴロヅナに夫の足下へ身を投げ伏させる位にやる筈であつたのだ。

「どうして妾の所念がお解りにならなかつたんでせう」と彼女は云つて「妾下にく」と云ひ通して居たのですけれど」

「さういたせば好かつたのですけれどねえ。なに御安心くださいまし。何もかも至極都合よく行つたのですから」とワルワラ・パーヴロヅナは明言した。

「何しろ彼人はまるで氷のやうに冷たいのですものねえ」とマリヤ・デミトリエヅナは云つた。「貴女は眞實お泣きなさいませんでしたけれど、妾最う彼人の眼に向ふと直に涙が一杯になつてしまひましたの。彼人は貴女をラヴリーキーに閉ぢ籠めてしまひたいのですのね。なに、構ふ事はありません、時々出て被來しやいましたな。男と云ふ者は皆薄情なものですのねえ」といかに意味ありげに首を

振つて彼女は言葉を結んだ。

「ですけれど女は兎にも角にも道に適つた事や人情の美しさを味ふ事が出来ずものねえ」とワルワラ・バーヴロヅナは云つて、しとやかにマリヤ・デミトリエヅナの前に跪つき、腕を廣げて相手の丸い身體に抱きついて、顔を押し當てた。その顔には人の悪さうな微笑が漂うて居た。でもマリヤ・デミトリエヅナの涙は又しても流れ出した。

ラヴレッスキーの方は家へ歸ると、直に自分の側使の部屋へ閉ぢ籠つて、長椅子の上へ身を投げた。そのまゝ彼は朝まで寢て居た。

四十四

その翌日は日曜であつた。ラヴレッスキーは朝の禮拜の鐘の音に目を覺されるには及ばなかつた。終夜臉を合さなかつたのだ。が、鐘の音は彼にいつぞやの日曜

にリーザの望で會堂へ行つた、その日の事を憶ひ出させた。慌てゝ彼は起き上つた。何とは知れぬ聲あつて、彼に今日會堂へ行けばリーザに遇へると云ふ事を告げるやうな氣がした。彼はワルワラ・バーヴロヅナが起きたらば晝餐までには歸つて来るからと告げるやうに云ひ付けて置いて、音も立てず家を出て、單調な悲しげな鐘の音が彼を呼んで居る方へと大股で歩き出した。會堂へ到り着いたのはまだ時刻が早かつたので、誰も來ては居なかつた。助祭が一人唱歌席で讀經をやつて居たが、その器械的な沈濁聲は、時々咳で途切れつゝも、或は低く或は高くいつまでも續いた。ラヴレッスキーは入口から遠からぬ所に席を占めた。と、參詣の人々が一人又一人入つて來て、立ち留つては、十字を切り、十字を切つては四方を拜んだ。人々の足音は、がらんとした、寂然たる會堂の中に響き、圓天井に反響した。頭布のついた破外套を着た、病身らしい、貧しげな、小さい老婆が、ラヴレッスキーの傍へ來て跪つて、熱心に祈りを上げた。その齒のない、黄色な、

皺くちやの顔には深い情緒が表はれた。その赤い眼はアイコノスタシスに懸けてある聖像をちつと仰ぎ見つめた。骨ばった手が絶えず外套の影から現れては、ゆるく、力を籠めて、大きな十字の印を書いた。髭もちやの、髷み面の百姓が一人、髭も剃らず頭も梳さずに、會堂へ入つて来て、いきなり兩膝を折り、性急に十字を切り、伏願を捧げる度に首を振ては反り返つた。その男の顔や振舞に現れた激しい悲みを見て、ラヴレッツキーはひどく心を動かされ、思ひ切つてその男の傍へ近寄つて、どんな悲しい事があるのかといたはり訊ねた。百姓は怖づくも氣むづかしさうに後へ退いて、ちつと彼を見守つた。

「息子が死にましたよ」と早口で云つて、百姓は又しても地面へひれ伏した。

「何物を以てしても彼等には寺の慰安に代へる事が出来ないんだな」とラヴレッツキーは思つた。そして彼も亦祈らうとした。併し彼の胸は堅く且重く、彼の思想は遙な所にあつた。彼は頻りにリーザを待つたが、リーザは來なかつた。會堂は

人で一杯になりかけたが、なほリーザは來なかつた。勤行が始まつた。助祭は既に福音書を読んだ。人々は最後の祈りを始めた。ラヴレッツキーはやゝ前の方へ進み出た——と、思ひがけなくリーザが目に入つた。リーザは彼よりも早く來て居たのだが、彼は見つけなかつたのだ。リーザは唱歌席と壁龕の間に隠れて居て、身動きもせず周圍を見廻すやうな事もしなかつた。ラヴレッツキーは勤行の濟むまで彼女から眼を放さずに、人知れず別を告げて居た。人々は散じかけたが、リーザは依然として残つて居た。何だかラヴレッツキーの出るのを待つて居るらしかつた。が、漸く最後の十字を切つて、振り向きもせずに出て行つた。附添の女は一人しか居なかつた。ラヴレッツキーはその後を追うて會堂を出で、往來で追ひつた。リーザは顔にヴェールを掛けて垂首れながら、非常に足早に歩いて居た。「リーザさん、お早う」とわざと平氣を装ひながらラヴレッツキーは大きな聲で呼んで、

「お伴しても好いですか」

彼女は何とも答へなかつた。ラヴレンスキーは並んで歩いた。

「貴女は僕の仕た事が御満足ですか」と聲を低くして彼は訊ねた。「昨日の事は御聞きでしたか」

「ええ」とリーザは小声で答へて「結構ですわ」かう云つて一層足を早めた。

「御満足ですか」

リーザは僅にうなづいて

「ねえ、フェードルさん」かう彼女は落着いては居るが微かな聲で口を切つて「どうぞ最上宅へは御出くださらないやうにねえ。なるだけ早く行つて頂きたいのです。どうぞせまた御目にかゝる時が御座いませうよ——多分一年位経てば。ですけれど今はどうぞ妾の爲と思召して御出ないやうにしてくださいまし。どうぞ御願ですから」

「リーザさん、僕は貴女の被仰る事はどんな事にでも進んで従ひますが、それにしても二人はこんなにして別れてしまふのでせうか。何とか云つて頂けないんでせうか」

「フェードルさん、貴方は此通り妾の傍を歩いて居らつしやいますが……併し貴方は最上妾とは餘程遠く離れておしまひなんですわねえ。尤もそれは貴方だけではありませんけれど——」

「と被仰ると」とラヴレンスキーは叫んで「つまりどうなんですか」

「いづれ御聞になりませう、多分——いえ、もうどうなつてもよろしうございませうから。どうぞ忘れて……いえ、忘れてはくださいますな、憶ひ出してくださいませうにねえ」

「僕に貴女を忘れろと被仰るんですか」

「あゝ最上充分です。左様なら。どうぞついて御出のないやうにねえ」

「リーザさん」とラヴレッキーは何か云ひかけたが

「左様なら、左様なら」とリーザは繰り返して云つて、ヴェールを一層引張り下し、殆んど走るやうに行つた。ラヴレッキーはその後影を見送つて、垂首れたまゝ、街道に沿うて引き返した。途中彼はレムにぶつかつた。レムも同じく帽子を鼻まで被り地面を見ながら歩いて來たのだ。

二人は無言のまま顔を見合つた。

「何か云ふ事がありますか」とラヴレッキーはとうとう口を切つた。

「何か云ふ事が」とレムは氣むづかしさうな顔で答へて「何も云ふ事はありませんが死んでしまつた、私達も死んでしまつたのです。で、貴方は右へ行かれるんでせう」

「さうです」

「私左へ行くのです。左様なら」

翌朝ラヴレッキーは妻を連れてラヴリーキーへ向けて出發した。妻はアダとジャスチンと共に先の箱馬車に乗り、夫は後から大きな四輪車に乗つた。美しい少女のアダは旅中少しも窓を離れなかつた。彼女は百姓や、女や、井戸や、馬の頭につけた轆や、鐘や、鳥の群や、物と云ふ物に驚かされたのだ。ジャスチンも彌張それと驚異の念を同じくして居た。ワルワラ・バーヴロヴナは二人の不思議さうに云つたり、叫んだりするのを見ては笑つた。彼女は非常に機嫌を好くして居た。彼女は〇市を出る前に夫との間に一種の和解を得たのだ。

「妾には貴方の御事情が充分解つて居ります」と彼女は夫に云つた。その敏捷な眼の中の表情から夫は妻には充分自分の現在の境遇が解つて居るのだと推定する事が出來た。「ですけれどせめてこれだけの事は貴方から是認していただかなければなりません。それは貴方と一緒に暮らす方が妾には氣樂だと云ふ事と、妾は決して貴方を拘束したり邪魔をしたりするやうな事を致しませんと云ふ事と、それ

から、妾の願はたゞアダの行末の事ばかりで、それ以上何の望もないと云ふ事、それだけはせめて認めていたゞかなければなりません』

『何しろお前は目的を達した譯だね』とラヴレッスキーは云つた。

『只今では妾は最望と云へば、永久に自分を世間から隠してしまひたい、それだけなのです。でも貴方の御情は片時も忘れは致しませんわ』

『もう好いよ、それは』とラヴレッスキーは遮つた。

『それでおひく貴方の獨立でありたい、平靜でありたいと被仰る御心も解つてそれを大事にかけるやうになるでございませうと思ひますの』こんな風に彼女は前から用意して置いたゞけの文句の有つたけを出して云つた。

ラヴレッスキーは丁寧に頭を下げた。ワルワラ・バーヴロヴナはそれを見て夫が心から自分に感謝して居るものと信じた。

その翌日の晩になつて一行はラヴリーキーに着いた。それから一週間ほどして

ラヴレッスキーは家の費用として五チループルを妻に残してモスクワへ出掛けた。

と、ラヴレッスキーの立つたその日のうちに、パンシンが遣つて來た。ワルワラ・バーヴロヴナが閑居にある自分を忘れてはくれないやうにとパンシンに頼んで置いたのだ。で彼女は出来るだけを盡して其人を迎へて、夜更まで階上の部屋は云ふに及ばず、庭までも樂器の音と歌の聲と快活なフランス語の話聲とを響かせた。かうして三日間ワルワラ・バーヴロヴナはパンシンを引き留めて置いた。パンシンが暇を告げた時には、情を籠めてワルワラの可愛い手を握り締めて、直に又來ると誓つた——彼はその約束を守つた。

四十五

リーザは母の家の二階に自分だけの部屋を持つて居た。きちんとした明るい小さい部屋で、小さい白い寢床があり、四隅と窓の前に鉢植の花があり、小さい

机があり、見臺があり、又壁には耶蘇の磔像がある。普通育兒房と呼ばれて居る種類の部屋で、リーザは此部屋で生れたのだ。ラヴレッキに遇つた會堂から歸つて来て、リーザは急にいつもよりは綿密に四邊の物を片付け、室内を隈なく掃除し、自分の手帳や女の友達から來た手紙などは残らず目を通して、更にそれをリボンで縛り、抽出と云ふ抽出は悉く閉ぢてしまひ、花に水をやり、一つ／＼花を手で撫でゝやつた。急ぎもせず、音も立てず、顔には一種の歡びとしたりやかな心遣の色を浮べて、リーザは一々それらの事を處理した。と最後に部屋の真中に立ち留つて、しづく／＼四邊を見廻し、耶蘇の磔像の懸けてある壁へ歩み寄り、跪つて組んだ手の上に頭を置き、そのまゝ暫くは身動きもせず居た。

と、そこへマルファ・チモフエーヴナが入つて来て、リーザのその有様に目を留めた。リーザは少しもそれに氣づかなかつた。老婦人はそのまゝ瓜先立で部屋

を出て、戸の外で五六遍大きな咳拂をした。リーザは慌てゝ立ち上つて涙に輝いた眼を拭いた。

「おや、まア、お前さんは又大變部屋を奇麗にしたもんだねえ」とマルファ・チモフエーヴナは云つて、若木の薔薇を植ゑた鉢に身體を屈めて「何て良い香だらう」と云つた。

リーザは物思はしげに叔母の方を眺めて

「貴女がそんな言葉をお遣ひになるのは不思議ですのねえ」と小聲で云つた。

「どんな言葉をさ」と口早に老婦人は問ひ返して「何だか氣味が悪いねえ」と云つて不意に帽子を脱ぎ捨て、リーザの寢床に腰を掛けて「妾最うどうしても我慢が出来なくなつたの。何しろやきもきし出してから四日になるんだもの。最うとても平氣な顔をしては居られない。お前さんの顔色がだん／＼蒼くなつて、萎れ切つて、加之に泣いてばかり居るのを妾はもうとても見ては居れなくなつた。

とてもく我慢が出来なくなつた。』

『まあ、何でせう、叔母さん』とリーザは云つて『何でもありませんわ』

『何でもないつて？』とマルファ・チモフエーヅナは叫んで『お前さんは妾でない外の人には明すんだらう。何でもない事がありますか。たつた今まで跪いて居た人が、睫毛がまだ涙で濡れて居る人が。眞實、何でもないのかえ。まあ、御覽、お前さんの顔がどんなになつて居るとお思ひなの。お前さんの眼がどんなになつて居るとお思ひなの——何でもないんだつて。お前さんは妾が何も知らなと思つてるんでせう』

『暫く待つて居てくださいよ。叔母さん。きつと何でもなくなるのですから』

『何でもなくなるつて、それは一體何時の事だえ。まあ、何と云ふんだらう。よくまあこんなにまでお前さんは彼を思ひ込んだものねえ。彼は最う年寄だよ、リーザ。そりや彼は深切な悪氣のない男には違ひないけれど、それが何だらう。』

妾達は皆善い人間なのさ。世間は廣いのだもの、いくらでも善い代物はあるのだよ』

『確に最う直に何でもなくなるんですわ。一體そんな事は夙に最う済んでしまつたのですけれど』

『リーザや、妾の云ふ事を能く聞いておくれ』とマルファ・チモフエーヅナは急に改まつて、リーザを自分の傍へ座らせ、髪を梳かしてやつたり、襟を直してやつたりしながら『今が一番苦しい盛りなんだから、何を持って行つてもお前さんの悲みは消えないやうな氣がするのさ。ね、好いかえ、愈す事の出来ないのは死ぬと云ふ事より外にはないのだよ。今のうちに自分できつぱり云ひ切つて置きなさい。妾は死ぬ事は厭だ』さうさへ自分にきめてしまへば、お前さんは自分ながらびつくりする程、早く、容易く切り抜ける事が出来ます。何よりも忍耐が緊甚だよ』

「叔母さん」とリーザは答へて「最うそれは濟んだ事なんですよ。すつかり最う定つてしまつたのです」

「濟んだつて？ どう濟んだのさ。まアお前さんの鼻の瘦せやうを御覽なさい。それで居て最う濟んだなんて。結構な濟み方だことねえ」

「え、濟んだのですわ、叔母さん。ですから若し叔母さんが妾を助けてくださる御心でしたらば」とリーザは急に勢込んで云つて、マルファ・チモフエーグナに抱きつき「ねえ、叔母さん、相談相手になつてくださいな、力を貸してくださいな、どうぞ御怒りなさらずに妾の心を汲んでくださいまし」

「一體まア、そりや如何云ふ事なんだえ。ね、どう云ふ事なの。御願だからさう妾を怖がらせないでね。でないと妾直に又怒鳴り出すのだから。ね、そんな顔をして妾を見るのは止して頂戴。一體そりや如何云ふ事なの。早く云つて聞かしておくれ」

「妾——妾ねえ」と云つてリーザはマルファ・チモフエーグナの胸に顔を隠して「妾修道院へ入りたいのです」と微な聲で云つた。

老婦人は殆んど寢床を跳ね飛ばすやうな風をして十字を切り、

「リーザ、ね、お前さんは一體何を云つてるのです。何を考へてるのです。まアどうしたのだらうねえ」と彼女はやうやく吃りく云つて「お寝なさい、ね、少しでも好いからお眠り、皆そりや眠が足りないからだよ」

リーザは首を上げた。頬は上氣して居た。

「いゝえ、叔母さん」と彼女は云つて「そんな事を被仰るのは止してください。妾固く決心しました。妾は祈りました。神様の御心を伺つたのです。何もかも最う最後です。叔母さんと一緒に暮しますのも最後です。此のやうな教訓は決して目的がなくて無暗に興へられるものではありません。それに妾がそんな事を思ふやうになりましたのも、決して今が始めてはありません。幸福は妾には得られま

せん。幸福を望んで居ります時ですら、妾の心はいつもく鬱いで居るのです。妾は残らず自分の罪も人の罪も知りました。阿父様はどうして妾達の財産を造つてくださったか、それも皆解りました。そのやうな罪はいつれ何かの償ひがなくなつてはなりませんのです。貴女も御氣の毒、阿母様も御氣の毒、レーノチカも氣の毒ですが、致し方ございません。妾は最う此家に住んで居る事が出来ないやうな氣がします。妾は皆さんに御暇乞をいたしました。家の内の物と云ふ物に別を告げました。何かしら妾を呼んで居ります。妾の心は悲しみて一杯になつて居ります。妾は最う永久に妾を隠してしまひたくなくなりました。どうぞ止めてくださいますな、説き聞かすやうな事はして下さいますな。どうぞ助けてください、でないと妾一人でこつそり行くやうな事にしなければなりません』

マルファ・チモフェーヴナは怖ろしくて震へながら姪の云ふ事を聞いて居た。

『此娘はこりや病氣なんだ。氣が狂ひかけて居るんだ』かう彼女は思つた。醫者

を呼びにやらにやならないが、どの醫者が好いか知らん。ゲデオノーヴスキーがいつぞや譽めて居たのがあつたけれど、彼人はいつも嘘を云ふから——でも今度のは眞實かも知れない』かうは思つたものゝ、いよ／＼リザが病氣でもなく、氣も狂つては居らず、何を云つて聞かせても返答がいつも變らない事を見るに及んで、マルファ・チモフェーヴナは心底から驚きもし悲しみもした。

『だがねえ、お前さんは知らないのだけれど』と説き出して『修道院の生活と云ふものは大變なものなんだよ。まあね、青い色の種油を食べさせられる、粗末な粗末な麻の着物を着せられる、それに寒い中を出歩かせる、そりや最うお前さんなんかにはとても辛抱の出来る所ではないんだよ。皆そりやアガフィヤの仕業だお前さんをそんなにしたのは彼女の仕業だよ。でも彼女は終には自分の樂の爲に生きて居るやうになつたぢやないか。お前さんだつて矢張そのやうに生きて行かなければなりません。せめて妾を安心して死なせておくれ。妾でも死んだらば、

お前さんの勝手にするが好いけれどねえ。何しろまアこんな事があるもんだらうか。斯様な者の爲めに——あんなやくざ者の爲めに、まア——あんな男の爲に——尼寺へ入らうなんて事が。まア、そんなに悲しいのならば、靈地巡りでもして、何處かの聖様に願懸でもして、祈の歌でも授かつて来る位は好いだらうけれど、頭に黒い頭巾なんか被るのは止して頂戴よ。ね、御願だから』かう云つてマルファ・チモフエーヴナはひどく泣いた。

リーザはそれを慰めて涙を拭いてやり、自分も泣いた。併し依然として自分の主張は押し通した。絶望の揚句マルファ・チモフエーヴナは一寸々それを阿母様に告げてしまふとか、何とか、何とか、さまざまに脅すやうな事を云つて見たが、矢張駄目であつた。僅に老夫人の切なる心を察して、リーザは六ヶ月だけ實行を延す事にした。その代りマルファ・チモフエーヴナの方では、さう云ふ風にして六ヶ月の内、リーザが心を翻へさなかつたらば、其時は自分も力を添へて、飽くまでマリ

ヤ・デミトリエヴナの承諾を得るやうにしてやらうと云ふ事を約束せなければならぬやうになつた。

一寸最う寒くなりかけると、ワルワラ・パーヴロヴナは、ちつと閑居して居ると云ふ約束をも何も反古にして、金に不足しない所から、早速最うホテルスブルグへ移つた。そこでは近くオー市の地方を去つて来たバンシンの盡力で、さう贅澤ではないが、いかにも氣持の好い貸間を探し當てた。オー市滞在の其の後、バンシンもすつかりマリヤ・デミトリエヴナの信用を無くしてしまつたので、ぱつたり訪問を止めてしまひ、殆どラヴリーキーへばかり行つて居た。ワルワラ・パーヴロヴナはすつかり彼を奴隷にしてしまつた。文字通の奴隷扱ひなのだ。バンシンに對するワルワラの二も三もない支配權は、眞實奴隷扱と云ふ言葉より外には云へ見やうがないのだ。

ラヴレッツキーは其冬はモスクワで送つた。翌年の春になつて、ロシヤの遠い片田舎のB——と云ふ修道院で、リーザの尼となつたと云ふ報知が、彼の許へ届いた。

四十五

八年は過ぎ去つた。又しても春が来た……

だが、こゝで暫くミハレーウイチとパンシント、それからラヴレッツキー夫人とこの三人の運命を述べて、然る後に本篇を結ぶ事としやう。ミハレーウイチは永い間放浪した揚句、とう／＼自分の適職を得た。彼はある官立学校の管理者となつたのだ。彼自身もその運命に頗る満足して居るし、生徒も彼を崇拜して、その眞似までした。パンシンは又だん／＼と地位が進んで、既に局長にまでなつた。彼が心持腰を屈めて歩くのは、首の周圍にかけたウラヂーミル十字章の重さに違ひない。心内の役人氣質の方が最後に藝術家氣質を凌いだのだ。顔にはまだ若い

者のやうな所があるが、色は最う黄色くなり、髪の毛も少くなつた。彼は今では最う歌も歌はなければ、書も書かないが、秘に文學をやつて居る。彼は教訓の體で喜劇を一篇書いた。今日の作家も活きた人物を寫し出して來なければならんやうになつて居るが、パンシンも矢張それに倣つて一人の「腕の悽い女」をその中に描き出した。この喜劇を彼は私に自分に対して深切にしてくれて居る二三の貴婦人に読んで聞かせた。そんな風ではあつたが、彼は結婚だけはどうしてもしなかつた。素敵に好い口が澤山あつたにも拘らず、彼は依然として獨身で通して居る。これにはワルワラ・バーヴロヴナが與つて力あつたのだ。彼女は今ではずっと以前と同じやうにバリーに住み通して居る。フェードル・イワーニチは巨額の約束手形を彼女に與へて、二度と來ないやうに防禦線を張つてしまつた。ワルワラ・バーヴロヴナはだん／＼年をとつて、だん／＼肥つて來た。でも相變らず愛嬌があつて、美しい。一體どんな者でもそれ相當な理想を持つて居るものだが、

ワルワラ・バーヴロヅナは小デューマの劇中に自分の理想的人物を見出した。例の肺病臭いセンチメンタルな『椿姫』の作が上場された時には、ワルワラは、せつせと芝居通ひをした。かのロココ夫人たる事が彼女には人間としての最大幸福であるやうに思はれた。彼女はいつぞや娘が自分よりも幸福になると云ふ事はあまり望しくないと言明言した事があつたが、併し運命は大丈夫そのやうな幸福をアダ嬢には與へるやうな事がないらしい。子供の頃のあの頬の蔷薇色をした、ふつくらと肥つた様子がなくなつて、弱々しい胸の、色澤の悪い娘となつてしまつた。神経は夙に最う錯亂してしまつて居た。ワルワラ・バーヴロヅナの崇拜者の數は減つたが、それでもまだ幾人かはあつた。恐らく死ぬまで少し位は引き留めて置くであらう。最近の崇拜者中で最も熱心なのは、ツアクルダロ・スクビルニコフとか云ふ退職の近衛武官で、年は三十八で、顔は髭もちやで、身體は圖抜けて巖丈な男であつた。ラヴレツキー夫人の客間を訪れるフランス人はその男を呼

んで「ルグロートーロードルクレーヌ」(ヌの大牛)と云つて居た。ワルワラ・バーヴロヅナは派手な人達の會合へはその男を呼ばなかつたが、それにしても最もワルワラの寵を被つて居たのは此の男であつた。こんな風にして八年は過ぎ去つた。又しても春の軟風は光と歡びとを天から吹き送つた。又しても春は地の上に、人々の上に微笑んだ。又してもその愛撫の下に萬象は花を開き、愛し、歌ふやうになつた。此の八年の間に〇——市には大した變もなかつたが、併しマリヤ・デミトリエヅナの家は何となく若々しくなつたやうに見えた。新しく塗られた壁は輝かに人を迎へ、開け放たれた窓々の硝子は夕日を受けて紅に輝いた。それ等の窓々からは愉快さうなきんく云ふ若い聲と絶間ない笑聲とが往來へ流れ出た。家全體が何となく生氣に充ち歡樂が溢れ瀾つて居るやうであつた。女主人はずつと以前に慕となつて居た。即ちリーザが尼になつた二年後にマリヤ・デミトリエヅナは死んだのだし、マルファ・チモフエーヴ

ナもそれから問もなく世を去つた。二人は市の墓地に相並んで埋つて居る。ナス
ターシヤ・カール・ボヅナも最早此世の人ではない。數年の間此の忠實な老婦人は
毎週亡き友の墓へ詣で通したと云ふ事だ。と、つひに自分の番になつて、今では
彼女の骨も矢張濕つばい土の中に埋られて居る。こんな風に年寄達は皆死んでし
まつたが、マリヤ・デミトリヅエナの家は、他人の手には渡らなかつた。家族の
手からは取り去られなかつた。家庭は破滅してしまひはしなかつた。瘦せぎすな
美しい娘となつたレーノチカと、その許嫁の戀人たる髮の毛の美しい騎兵士官と
つひ近頃ベテルスブルグで結婚したマリヤ・デミトリヅエナの息子と、春景色を
見旁々夫に連れられて〇——市へ來たその新妻とその妹だと云ふ頗の赤い、眼の
光澤の好い十六歳の女學生と、大きくなり、美しくなつたシユーロチカと、斯う
云つた若い人々が、今はカリーチン家の家族を形造り、その人達の笑聲と話聲と
は家中の壁に響き渡るのであつた。家の中の物は残らず變つた。物と云ふ物悉く

新しい住人に相應して居る。齒を剃き出した、笑談ばかり云ふ、髭のない小僧が
以前からの眞面目臭つた顔をした老僕と代つた。二疋の獵犬が暴々しく飛び廻つ
たり、長椅子の上を跳ね廻つたりして居る。以前はその長椅子の上にはかの肥つ
たロスカが嚴然と構へてのそく歩きをして居たものだ。厩はすらりとした競走
馬や、元氣の好い馬車馬や、鬘を編んだ遠乗の馬や、ドーン産の乗馬が一杯にな
つて居た。朝、晝、晩の飯時は煮え返るやうに賑はつた。近所の人達は「こんな
事は今迄になかつた事だ」と云ひ合つた。

とある夕方まだやつと二十四だと云ふレーノチカの許嫁を年頭にした、カリー
チン家の人達は或る遊戯をやつて居た。大して込み入つたものではないのだが、
皆の愉快さうな笑聲だけ聞くと、どんなに面白い遊びだらうかと思ふ程であつた
追ひつ追はれつして彼等は部屋の中を駆け廻つた。犬までが驅けたり吠えたりし
た。窓に懸けてあるカナリヤまでが、負けまいとして、喉を絞り、いつもの啼聲

だけでは止めずに張り裂けるやうな聲を立て、啼いた。

此耳を聳させるやうな樂さの眞最中、泥に汚れた一輛の馬車が門で留つた。そして旅行服を着けた四十五位の一人の人が馬車から下りて、呆然として立ち盡した。やゝ暫く身動きもせず立つたまゝ、その人は注意力の籠つたやうな眼付で家を見守つて居たが、やがて小さい方の門から庭へ入り、そろ／＼階段を上つた。玄關には誰も居なかつたが、突然一つの部屋の戸が開いて、シユーロチカが眞赤な顔をして夢中に飛び出して來た。と、きん／＼云ふ叫び聲を立て、若い人達の一團が、追つかけて出た。見ると見知らぬ人が居るので、皆はひよいと立ち留つて、急に静まつてしまつた。でもその人に据ゑつけられた若い人達の澄んだ眼は一樣に親しげな表情を帯びて居た。活き／＼とした皆の顔がにこ／＼して居る間にマリヤ・デミトリエヅナの長男が先づ客の傍へ進み出て、丁寧に要事を訊ねた。「私はラヴレツキーと云ふ者です」と客は答へた。

彼は若い人達の聲を合せた叫び聲で報ひられた——但しそれは皆が殆んど忘れて居た親戚の人が遙々訪ねて來て呉れたのを、非常に喜んだからではなくて、只何の事はなく若い人達は嬉しいのだ。何かにつけて騒ぎ立てるのだ。彼等は立ち所にラヴレツキーを取り巻いた。レーノチカは古馴染と云ふ所から一番先に名乗を揚げて、最少し待つて居て貰へば自分の方からそれと解つたに違ひないのだかと云ふ事を述べた。彼女は家中の者を一々名を呼んで、ラヴレツキーに紹介はした。自分の許嫁の名まで云つた。彼等は食堂を抜けて客間へと集つた。その二つの部屋共壁紙が貼り變へられて居たが、道具だけは以前のまゝであつた。ラヴレツキーはピアノには見覚えがあつた。窓の刺繡臺までが以前のまゝで以前のまゝの場所に置いてある。而もそれには八年前にあつたと同じ遣り掛けたまゝの刺繡があるやうな氣がした。若い人達は彼を居心地の好い肱掛椅子に坐らせて、それを取巻いて皆の人達が座を占めた。尋問や、感叫や、感叫や、珍談が相次いで出た。

「随分お久し振でございましたのねえ」とレーノチカはあどけなく云つて『奥様にもちつとも御目にかゝりませんの』

「無論さ」と兄は慌てゝ妹を遮つて『僕はお前をペテルスグルグへ連れてつてしまつたし、フェードル・イワーニチさんはずつと田舎に暮らしてゐらしたんだもの』

「えゝ、それに阿母様はあの後直にお亡くなりでしたし』

「それにマルファ・チモフェーヴナ様も』としエーロチカが云つた。

「それにナスターシャ・カールボヴナさんも』とレーノチカが云ひ添へて『それからあのレム先生も』

「え？ レムさんも死んだんですか』とラヴレツキーは訊ねた。

「さうです』とカリーチン家の若主人が答へて『何でも此處を出てオデツサの方へいらしたんです。誰かにそゝのかされたんだとか云ひますが、兎に角オデツサ

へ行つて亡くなつたのです』

「彼人が何か曲を殘して行つたやうな事を御聞きにならなかつたですか』

「存じませんが、そんな事はないらしいですなア』
皆は黙つて周囲をじろく見廻した。微な幽鬱の雲が凡ての若い顔にちらと見えた。

「でもマトロスはまだ生きて居りますわ』とレーノチカが突然云つた。

「それにゲデオノーヴスキーさんも』と兄が云ひ足した。

ゲデオノーヴスキーの名を聞くと共に面白さうな笑聲が溢れた。

「さうです。彼人はまだ生きて居ます。矢張以前通り虚言家ですよ』とマリヤ・デミトリエヴナの長男が云つて『まあ此の馬鹿ちやんが昨日』と自分の妻君の妹を指しながら『この先生が彼の方の嗅箱に胡椒を入れて置いたもんでせう』

「それを嗅ぎなすつた時の様子つたら』とレーノチカが大きな聲で云つた。と又

してもやるせないやうな笑聲が湧き返つた。

「つひ先日リーザさんの消息がありました」かうカーリーチン家の若主人が云つた。座が再びしんとした。「それも善い消息でして、何でも彼女も此頃では餘程健康も回復したさうです」

「彌張同じ修道院に居らつしやるんですか」と苦しいのを努めて訊ねた。

「さうです彌張元の所です」

「自分では手紙を寄越しなさんのですか」

「え、ちつとも。ですが他の人達を通していろいろ消息を聞くんです」

ふと深い沈黙が続いた。「慈悲深い天使が頭の上をお通りなんだ」と皆は思つた。「庭の方へ御出になりませんか」とラヴレッスキーの方へ向いて若いカーリーチンが云つた。「今が好い盛りです。少しは荒させてしまひましたけれど」

ラヴレッスキーは庭へ出た。先づ彼の眼に入つたものは、嘗てリーザと共に二度

とは得難い、楽しい數分時を送つたその腰掛であつた。今は黒く色が着いて、反り曲つて居るが、彼にはそれと知れた。彼の心は今楽しいとも苦しいともつかぬ情感に充ち満ちて居る——それは消え去つた青春、ありし日の幸福に對する鋭い悲みの情なのだ。彼は若い人達と共に木下道に沿うて歩いた。菩提樹は八年の間左程年古りたやうにも、伸びたやうにも見えないが、その蔭は以前よりはすつと暗くなつた。それに引き更へ、植込と云ふ植込はどれも驚く程伸びた。木苺はなかく強さうに枝を張り、榛はひどい藪になつた。四方八方から木や草やライラックのすがすがしい香が絶間なくして来る。

「何だか「隅の隅のおニヤンちゃん」をするに好ささうな場所ねえ」菩提樹に圍まれた、とある小さな芝生へ皆が近づくと突然レーノチカが叫んで「それに丁度五人居るわ」

「フェードル・イワーニチさんが居らつしやるぢやないか」と兄は答へて「それ

ともお前を数に入れなかつたんか」

レーノチカは一寸顔を赤くして

「でもフェードル・イワーニチさんはあんなに年を取つて居らつしやるから——」
と云ひかけると

「どうぞ始めてください」とラヴレツキは慌てゝ其の言葉を遮つて「私にはお構ひなく。貴方等の仲間入が出来ない方が、私は却て面白い事があるんですよ。だから私の事は少しも御氣を兼ねなされるに及びません。老人には又貴方等の御存じない仕事があります。そりやもう如何な面白い事にも代へられん事なんです——つまり追憶と云ふ事です」

若い人達は形を正して、と云ふよりは寧ろ皮肉な尊敬を以て——まるで教師から物でも教はるやうな恰好で——ラヴレツキの云ふ事を傾聴して居たが、言葉が切れると不意に散ばつて、芝生へと驅けて行つた。四人は木の傍に立ち、一人

だけ真中へ出て、いよ／＼遊びが始まつた。

かくてラヴレツキは再び家の中へ引き返して食堂へ入り、ピアノの傍へ寄つてとある鍵盤に觸れて見た。微かなながら澄んだ音が出た。その調子は、すつと以前樂しかつた夜の、レムが今は亡き人であるレムが、歡樂の底へ自分を引き込んだ、その時の高潮した旋律の始まつた調子であつた。次にラヴレツキは客間へ入つて、やゝ暫く其處を去らなかつた。其部屋——幾度も幾十度もリーザと遇つた其部屋では、リーザの面影が最も活々と彼の前に現れた。その代りリーザに對する彼の悲みは、堪へがたきまでに痛切に感じられた。世に亡き人を憶ふ悲みならば、まだしも幾分の安かさがあらう。併しリーザはまだ生きて居る。何處かに生きて居る。世の中から隠れた、遠い／＼所にまで生きて居るのだ。彼はリーザを生きて居る人として思つて見た。併し嘗て自分が心を燃やしたあの少女が、いかにしても彼の薄暗い、蒼白い影の裡に、尼の衣に身を装うて、香の煙の曇つた

中に包まれて居やうとは思へなかつた。ラヴレツキーは又自分の姿をも認ることが出来なかつた。心の中でリーザを思ひ見るやうに、自分の姿を思つて見ても、どうしても解らなかつた。此の八年の間に彼は人生の一轉期を経過した。そのやうな廻轉期を経過する人はさう多くある譯はないが、それにしても最後まで善人たり得るには、此の難關を通つた者でなければならぬのだ。彼は今眞實自分の幸福や自分一人の目的を思ふたりする事は止めてしまつた。彼はだん／＼と落ち着いて來た。秘さずに云へば、彼は顔ばかりでなく身體全體がだん／＼老いて來た。彼は情に於てもだん／＼老いて來たのだ。誰やらが云つたやうに、年を取つても若い氣で通す事は、さうむづかしい事でないばかりか、殆んど笑ふべき事だ。善に對する信念と堅固な意志と仕事に對する誠意とを老いてなほ失はぬ者こそ、満足に値するのだ。ラヴレツキーには満足して好いだけの立派な理由があつた。事實に於て彼は立派な百姓となつたのだ。事實に於て彼は地を耕す事を知つたのだ。

彼の勞働は自分の爲めのみに留らなかつた。彼は全力を盡して、小作人の幸福に固い地盤を與へたのだ。

ラヴレツキーはやがて家から庭へ出て、身に親しい例の腰掛に腰を下したこの懐しい場所に坐つて彼は家の方へ顔を向けた。そこは之を最後と彼が、黄金色をした歡樂の酒の泡立ち輝く魔の盃へ甲斐なくも手を伸べた、憶出多い家である。彼、淋しい、家なき放浪者たる彼が、過ぎ來し生涯の追懷に沈んで居る時に、一方では若い時代の人達、今や彼の跡を占めた若い人達の、樂しげな叫聲が、庭を越えて彼の所へ漂うて來た。彼の心は悲んで居る。併しその爲めに壓へつけられはしない。又苦しくもない。悲しむべき事は多いが、恥づべき何物もないのだ。

『思ふさま遊べ、樂しくしろ、強くなれ、力に充ちた若い人達よ』と彼は思つた。而も彼の冥想には何等の痛苦も伴はない。『お前達の生活はお前達の前に開けて

居る。お前達には生活の歩みはまだ比較的容易いのだ。お前達は、私等のやつて来たやうに、自分の道を探し出さうとして、悶いたり、倒れたり、又しても闇の中に起き上つたり、そんな事は爲ないやうにしる。そんな事は私等が最う十分堪へ忍んで来たのだ——尤も私等の仲間でもそれに堪へなかつた者が随分ある——だがお前達はたゞお前達の天職を盡せばそれで好いのだ、思ふさま働け、私のやうな老人の恵もきつとお前達の身に爲めになるに違ない。私は最う今日以後、このやうな感激の後には、たゞ最う最後の暇乞をする位なものだ——悲いには違なからうが、併し羨みの心なく、また如何なるやましい情もなく、死の前に、私等を待ち給ふ神様の前に「來れ、淋しき老年期よ。あゝ此の無用なる生命を焼き盡せよ」とでも云へば、それで済むのだ」

ラヴレツキーは静に起ち上つて、静に去つた。何人もそれに氣づかず、何人もそれを留めなかつた。樂しげな叫聲は前よりは一層高く、菩提樹の高く濃い緑の

隔の彼方に響いた。ラヴレツキーは馬車に乗つて、馭者に「お前達に、何人も馬は急がせないやうに命じた。

「これで 終か」と不満足な讀者は多分訊ねるだらう。「……」
どうなつた、リーザはどうした」かうも云ふだらう。だが……
既に——人生の戦場を退いた人々について、何の語るべき事があるか、聞けばラヴレツキーはリーザが姿を隠して居る片田舎の修道院を訪れて、リーザにも遇つたと云ふ事だ。内陣から内陣へと移る時、リーザはラヴレツキーの直傍を通り過ぎ、法衣姿の平かな、急がない、やさしげな歩振で歩を運んだ。併し彼の方には眼もくれなかつた。たゞ彼の居た側の眼の睫毛が少しばかり震へ、瘦せた顔は心持下へ屈み、念珠を巻きつけた合掌の指が前よりも一層固く組み合された位のものだ。二人は何と思つたか、二人は如何感じたか、誰かそれを知り得やう、誰かそれを語り得やう。唯それ人生斯の如き時あり、斯の如き感情あり、人はたゞ其等を指

示するを得るのみ——それ以上は追究すべきでない。

貴族の家終

明治四十三年十月十六日印刷
明治四十三年十月二十日發行

定價金壹圓

不許
複製

譯者 相馬御風

發行者 佐藤義亮

印刷者 吉岡省吾

印刷所 東京市神田區中猿樂町四番地
秀光舎印刷所

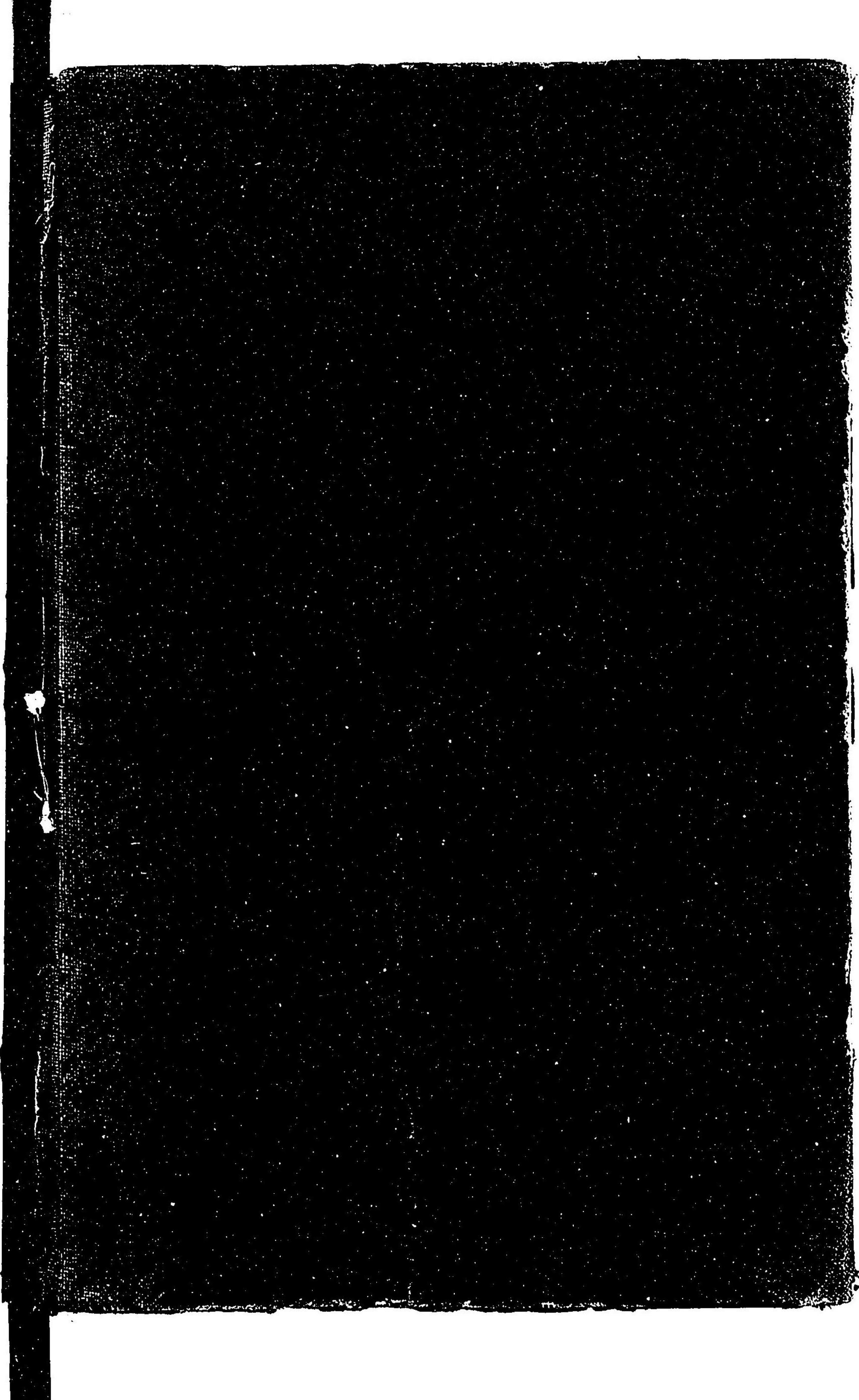
發行所 東京市麴町區飯田町三丁目廿五番地
新潮社

電話(番町)二二二三番
振替(東京)九六三九番

8.4.22

46

98
281



98
281

100940-000-1

98-281

貴族の家

ツルゲーネフ/著

M43

DBY-0203



